

## 図解－アマルティア・センの厚生経済学批判

### 1 アマルティア・センについて

センの貧困研究は9歳の時に体験したベンガル飢饉（1943年）がベースにあるという。ベンガルに生まれ育ったセンは18才の時に数学、物理学から厚生経済学・社会選択論の分野へと転じ、カルカッタ大学のプレジデンシー・カレッジにおいて1953年に学士号を取得している。同年ケンブリッジのトリニティー・カレッジに留学、1959年に博士学位を取得、この学位請求論文は「開発途上国における技術選択の問題<sup>1</sup>」であり、センの研究活動における「経済成長論、費用—便益分析、開発経済学など、多くの分野におけるその後の多彩な研究の端緒となったもの<sup>2</sup>」と評価されている。センの最初の著作である。

その後、カルカッタのジャダブール大学(1957～58)、ケンブリッジ大学トリニティー・カレッジのフェロー（1957～63）、デリー・スクール・オブ・エコノミクス（DES）（1963～1971）において教鞭をとり、この（DSE）時代に『集会的選択と社会的厚生』（Sen1970）の執筆を始めている。この論文がアローに始る「社会的選択の理論に対する革新的な業績<sup>3</sup>」であり、センの首著である。

この時代のセンの仕事は「アローの『不確定性定理』を更に進めて、リベラリズムの価値観の中に『全員一致の原理（パレート原理）』と『個人の自己決定の承認』と言う二つの要素」があり、これが両立不可能である事を数理的に証明して、効用に依拠する『パレート原理と言う厚生基準』と『個人の自己決定権の承認』などの非効用情報を重視する社会倫理との間の根本的な緊張関係を明らかにした<sup>4</sup>とされている。ここに自由社会の常識的見解であった「パレート原理と、個人の自己決定、自由の尊重の両立」はできない事が顕かにされ、パレート・リベラル・パラドックスと言われている。

時はネールの死後「インド計画化の黄金時代」は二度と戻ってはこなかったと言う<sup>5</sup>時代。インド・エコノミスト達がインドを後にする動きの中で、1971年にセンはロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LES）の経済学教授に就任する。このLESの時代はセンの「正統派経済学の基礎に対する深刻な倫理的批判の開始<sup>6</sup>」の時とされ、1973年の『不平等の経済学』、そして1976年「センの貧困測度（セン測度）」の開発へと続いている。

---

1 鈴村興太郎 後藤玲子 『アマルティア・セン—経済学と倫理学』P5 実教出版  
2005年11月25日

2 同上

3 同上 P7

4 アマルティア・セン『不平等の再検討』池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳 P247  
岩波書店 2005年6月

5 絵所秀紀 <http://repo.lib.hosei.ac.jp/bitstream/10114/1433/1/69-2esho.pdf> 2014/12/05

6 アマルティア・セン著 鈴村興太郎・須賀晃一訳『不平等の経済学』P280  
東洋経済出版社 2008年9月

## 2. センの厚生主義批判

センの議論は、アローに始る社会的選択理論の分野で、伝統的な厚生経済学が陥っていた「経済学の倫理的側面を正面から議論する事を回避<sup>7</sup>」する論理構成に対して、自己利益最大化を行動原理とする合理的経済人（ホモエコノミカス）の選択行動をベースにする、経済社会の状態、その善し悪しを判断するその「枠組み」自体の限界を衝くものであった。

正統派の厚生経済学の本質とは、「選好・利害・厚生・選択と言う一本は全く異質な一概念を区別できない『合理的馬鹿』<sup>8</sup>」であり、それを論理の中核に据えている厚生経済学は、個人的利害（損得）、厚生（改善・改悪（善し悪し））、選択までもが選好（好き嫌い）の最適化などとして、選好に過酷な重荷を負わせている<sup>9</sup>と批判する。

この指摘は社会福祉の側からすれば、厚生情報の狭隘さ、その帰結主義的判断、総和主義的論理への反対と捉える事ができるであろう。選好に帰着する厚生（効用）を尺度にして価値評価を行おうとすれば、人間活動、生活構造の全体性、社会関係の相互依存性、非厚生情報（人権、信仰、愛情、プロセスの意味、共同体への参加など）の価値を無視せざるを得ないのである。センの主張、この視点は、ソーシャルワーク活動が歴史的経過の中で培ってきた実践的価値、その主張とは双方向的であると言わざるを得ない。

時代は戦後復興となった1970年代であり、相対的貧困が絶対的貧困にとって代わり、もはや相対的貧困の時代が到来したという言説が興隆していた。1970年、センは最小限の自由とパレート原理は両立しないという有名な上記パレート・リベラル・パラドックスを示し、この内容が戦後の自由社会の常識というべき、自由市場への信頼や厚生主義的原理を否定したと理解されて、各社会哲学分野の注目を集め、その後の反厚生主義な研究を牽引する。

財がもたらす心理的な満足感である「厚生」を社会的な価値の基準とする思想、厚生主義は、一つは個人の自由、人権の視点から、もう一つは貧困、不平等を測る指数、測度の開発研究から反論がなされた<sup>10</sup>という。アメリカで起こった反厚生主義的正義論は、1970年代後半の福祉国家の危機、1979年のサッチャー政権、1980年のリーガン大統領の登場と続く中で、R・ドウォーキンらによって、個人の基本的権利・人権を究極的価値とする権利的正義論へと発展する<sup>11</sup>。

---

<sup>7</sup> アマルティア・セン著 鈴木興太郎・須賀晃一訳『不平等の経済学』P282

東洋経済出版社 2008年9月

<sup>8</sup> 同上 P283

<sup>9</sup> 鈴木興太郎 後藤玲子 『アマルティア・セン—経済学と倫理学』P24 実教出版

2005年11月25日

<sup>10</sup> 参) <ftp://papers.mpiew-jena.mpg.de/esi/discussionpapers/2004-03.pdf> 20行 071122

20

<sup>11</sup> 田中成明 「現代の法哲学者たち」長尾隆一編 P11 日本評論社1987年8月

センはアローの不確定性定理において課された「公理（条件）」の部分的解除、緩和を通して社会的厚生関数を精査し、不確定性の回避、関数の適用の拡張を試み、その延長上に社会的意思決定や社会評価のための数理分析の基礎を築いている。それは貧困・不平等研究において「経済的不平等に関する体系的・理論的・思想的な整理と問題提起」となる新しい測度（指標）の開発であり、「貧困の計測方法に対する功利主義的な検討と新しい測度の提唱<sup>12)</sup>」であった。その貧困測度（指標）が「セン測度」である。

セン測度の提示後の 1980 年代には、センは厚生を媒介として（所得情報を媒介として）貧困や不平等を完備的に測る事ができる測度は特定できず、この手法での貧困計測は相対性を払拭できない事から、厚生情報の偏狭さ、限界を証明し、非厚生情報を媒介にする貧困への「新しいアプローチ」、「ケイパビリティ・アプローチ」へと向かうわけである。

### 3. センの貧困測度

戦後復興なった 1970 年代、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LES）時代のセンは人々の低所得についての情報（所得分布）を厚生という「人間の心理的な満足観」の少なさとして評価して、社会の貧困度を測定するという伝統的な「社会的厚生関数」、貧困指標（測度）の検討を進めていた。貧困とは、貧困線以下の低所得状態を指している。

この伝統的な手法の中で、センはそれまでの貧困者を均一な集団として扱う測度（貧困率、貧困ギャップ比率）とは一線を画する、貧困者内部の格差を反映する新しい「貧困測度」を開発している。現在多用されている FTG 測度はこの測度を改変したものである。

この測度こそ 1976 年に公刊された論文「貧困：測定への序数的アプローチ」[Sen(1976b)] に於いて発表された、貧困率、貧困ギャップ比率、貧困者のジニ係数を抱える新しい測度、「セン測度」であり、『公理的に導出されたという理論的アピールに加えて、貧困層内部の不平等をジニ係数という形で取り込んだものと解釈できる為、直感的にも理解しやすく優れたものであった。<sup>13)</sup>』とされた。

セン測度は「貧困と不平等と言う相互に関連してはいるが異なった二つの関心を統合する最初の試み<sup>14)</sup>」とされ、相対的貧困（不平等問題）と絶対的貧困の関係を数理的に明らかにしている。

#### (1) セン測度（センの貧困測度）の図解

<sup>12)</sup> 鈴木興太郎 後藤玲子 『アマルティア・セン—経済学と倫理学』P8 実教出版  
2005 年 11 月 25 日

<sup>13)</sup> 絵所秀紀 山崎幸治編著 『アマルティア・センの世界—経済学と開発研究の架橋—』  
P86 19 行 晃洋書房 2005 年 2 月 25 日

<sup>14)</sup> 鈴木興太郎 後藤玲子 『アマルティア・セン—経済学と倫理学』P223 実教出版  
2005 年 11 月 25 日

セン測度は結局以下の様に纏められ、二つの項に分かれている。後項部分には不平等指標として親しみのあるジニ係数が、「入れ子」のように抱えている。

**センの貧困測度** : (セン測度のジニ関数の均等分割線は貧困ラインである)

$$P \text{ (貧困の度合い)} = \frac{H(I+(1-I) \times \text{貧困者内部のジニ関数})}{\text{全人口数}}$$

展開すると:  $P \text{ (貧困の度合い)} = HI + \frac{H(1-I) \times \text{貧困者内部のジニ関数}}{\text{全人口数}}$

$$H \text{ (貧困率)} : \frac{\text{貧困線以下の人数}}{\text{全人口数}}$$

$$I \text{ (所得ギャップ比率)} : \frac{\text{貧困線} - \text{貧困者所得の平均}}{\text{貧困線}}$$

— 説明 —

ある大きさの富を保有している社会の構成員を、貧困者集団と非貧困者（富者）集団という二つに分ける事ができる。貧困者と非貧困者を分けるのは所得の大小であり、貧困線がその境界である。

今、貧困者集団の総所得額は①（貧困者数×貧困者平均所得）である。そしてこの社会において、全ての貧困者が脱貧困するためには、全ての貧困者所得が貧困線に達している事が必要であり、その仮定的な必要所得総額は②（貧困者数×貧困線所得）である。そうすると、②と①の差の分だけの総所得額が追加的に増える事ができると、その社会の全貧困者は脱貧困できて、①と②は一致する。

この関係をセン測度の図解（1）において、①を紫の部分の面積、②を短い緑の方形 ABCF の面積、そして②-①をピンクの部分の面積として示している。

非貧困者（富者）の所得は貧困線以上だが、セン測度は非貧困者（富者）の貧困線以上の所得については考慮せずに、社会の全人口が貧困線所得を達成する為に必要な仮定的な総所得額（全人口×貧困線）を問題にして、この社会の脱貧困の為に必要な総所得額（③ 緑の長い方形 ABDE）を1として、①、②-①の割合を弾き出している。

（2）前項について

セン測度の前項部分は貧困率（貧困者数／全人口）と所得ギャップ比率の積であり、貧困の広がりと言われる。この所得ギャップ比率とは {「貧困線所得」と「貧困者所得平均値」の差} の割合で、貧困線を1とした時の値である。

$$\begin{aligned} \text{前項} &= \frac{\text{貧困者数}}{\text{全人口}} \times \frac{\text{貧困線所得} - \text{貧困者平均所得}}{\text{貧困線所得}} \\ &= \frac{\text{貧困者数} \times \text{貧困線所得} - \text{貧困者数} \times \text{貧困者平均所得}}{\text{全人口} \times \text{貧困線所得}} \\ &= \frac{\text{②} - \text{①}}{\text{③ABDE}} \end{aligned}$$

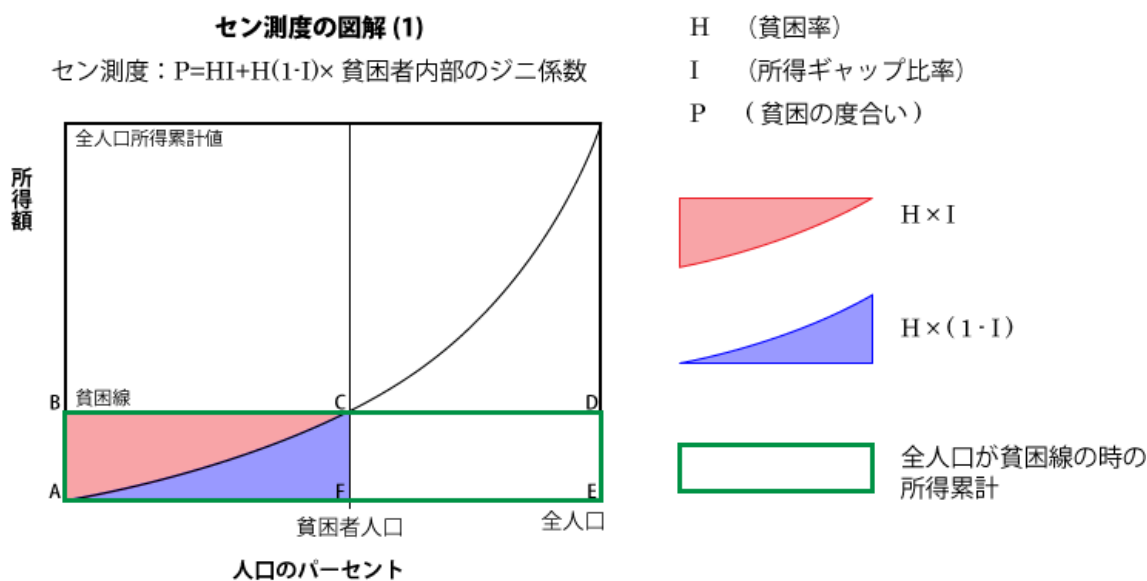
（貧困者数×貧困者平均所得）とは ①（実際の貧困者総所得）

（貧困者数×貧困線所得）とは ②（全貧困者が脱貧困するために必要な貧困者総所得）

（全人口×貧困線所得）とは ③ABDE（全人口が脱貧困するために必要な全人口総所得）

[前項は図解(1)の、緑の方形 ABDE を 1 とした時のピンクの ABC の面積比率である。]

この値は、セン測度の用いている貧困線（相対的貧困線）が絶対的貧困線に近似しているような社会を想定すると、全ての社会構成員が脱貧困する（貧困線に達して非貧困者となる）ための総所得額を 1 とした場合の、全貧困者が脱貧困するために必要な所得総額の割合を示している。この値は社会の脱絶対的貧困の為に必要な所得総額に焦点をあてており、絶対的貧困をなぞっていると考える事ができよう。



図解 (1) の説明：このグラフの横軸はその社会の人口を表し、右端は人口 p 人の社会では p である。なじみのあるローレンツ曲線との違いは、縦軸が世帯あるいは個人の所得額であって所得累計額では無い点である。ジニ係数の中のローレンツ曲線では、縦軸は所得累計額だが、ここでは累計される前の素の所得額を採っている。その為、貧困線所得は BD の水平なラインとなっており、図(2)のローレンツ曲線をとるジニ係数では、貧困線は 45 度の傾きの均等分割線である。なのでこの曲線はいわば、なじみのあるローレンツ曲線を微分した曲線である。前項部分は図解(1)における (ピンクの面積) / (緑の長い方形の面積) であり、後項の係数  $H(1-I)$  は (紫の面積) / (緑の長い方形の面積) に相当する。

### (3) 後項について

後項部分はジニ関数を抱えている事で分かり易く示されているように、不平等、格差を反映する部分である。

後項部分の係数は  $H(1-I)$  だが、前項と比較すると、前項は貧困率に「ギャップ比率」そのものが掛けられているのに対して、後項では貧困率に  $(1 - \text{ギャップ比率})$  が掛けられている事である。ギャップ比率とは「貧困線」を 1 とした時の「貧困者平均所得の差」の割

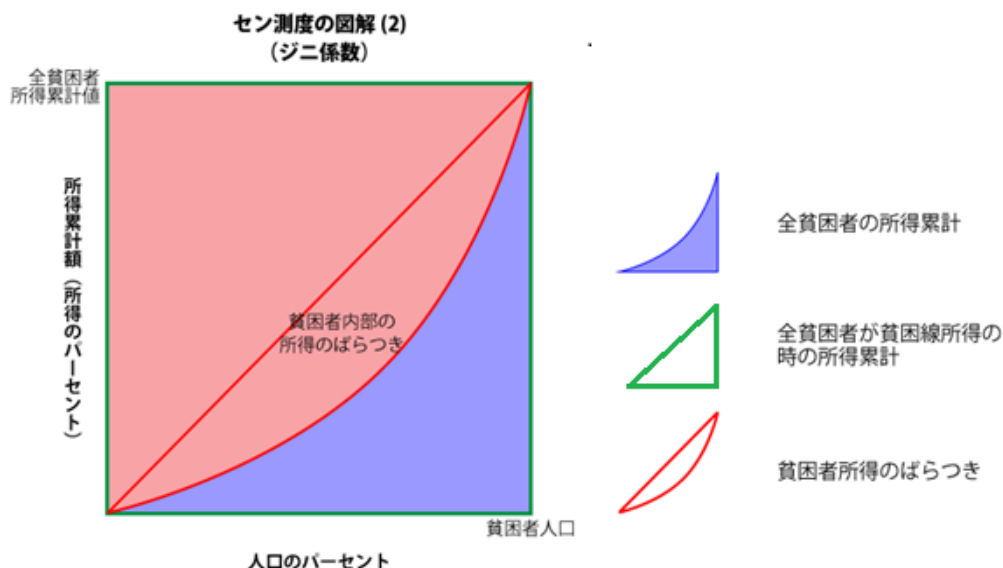
合なので、(1-ギャップ比率)とは**貧困者平均所得**そのものの割合である。そこで係数部分  $H(1-I)$  とは、下記のようにあらわされる。

$$\begin{aligned} \text{係数部分} &= (\text{貧困者数} / \text{全人口}) \times (\text{貧困者所得平均値} / \text{貧困線所得}) \\ &= (\text{貧困者数} \times \text{貧困者所得平均}) / (\text{全人口} \times \text{貧困線所得}) \\ &= \text{①} / \text{③ABDE} \end{aligned}$$

① (貧困者数×貧困者平均所得) とは 実際の貧困者総所得 (紫の面積)

③ (全人口×貧困線所得) とは (全人口が脱貧困する為に必要な総所得) (緑の方形面積)

[この値は図形(1)の、**緑の長い方形 ABDE** を 1 とした時の**紫の ACF** の面積比率である。] そしてこの値にジニ係数を掛けている後項全体は、現実の貧困者所得のばらつき、不平等度を示していると考えられる。



図解の説明：図解 (2) は、図解 (1) における横軸、貧困者人口までを切り取って、貧困者の所得の順位付けにより、**所得累計値**を縦軸にとっており、縦軸、横軸は**1対1**。

前項同様セン測度の用いている貧困線 (相対的貧困線) が絶対的貧困線に近似しているような社会を想定すると、この内容 (後項部分) は貧困者の所得配分上のばらつき、不平等、相対的貧困をなぞっていると考える事ができよう。

#### (4) 図解のまとめ

セン測度の前項を絶対的貧困、後項を相対的貧困をなぞっていると捉えると、この二つの関係は先進国型、後進国型の貧困の様相と一致している。

絶対的貧困は生物学的生存を維持する絶対量を軸として大きく変化しないが、相対的貧困は社会の貧困率や貧困ギャップ比率、貧困者のジニ係数の変化、貧困線水準の動向により伸縮する事象であり、所得分布の変化によりモジュール的に伸展して絶対的貧困を覆い、あるいは露出させる。この関係がセン測度の前項、後項の関係と一致している。

そこで、セン測度は絶対的貧困、相対的貧困という二つの貧困概念が、互いに明確に切り分ける事が出来ない、その社会の貧困者比率、貧困ギャップ比率、貧困者の所得格差の変化（ジニ関数）、そして相対的貧困線の絶対的貧困線との乖離度により互いの重なり合いを変化させる、重なり合った貧困として、貧困全体を形づくっている事を示していると考えられる事ができるであろう。

#### 4. 公理による貧困、不平等へのアプローチについて

上記セン測度のように、所得情報から社会的厚生を導く社会的厚生関数(貧困測度など)を構成して、貧困や不平等問題を測ろうとする場合、貧困や不平等といった複雑な問題の評価を進める場合には、価値自由な事実評価を求めている、どの側面をどれだけ重要視し注目するのかという、何だかの立場性（価値規範性）を抱えざるを得ない。

たとえばセン測度は、貧困者を貧困者集団として一括りにしないで、貧困者内部の格差、所得の偏りに注目する貧困測度であり、貧困線所得に近い比較的豊かな貧困者よりも、極貧層の状態に注目して、より貧しい人々の人数の多さ、所得の低さに反応できる貧困測度としてデザインされ、構成されている。

上記のような考え方、一定の立場性、価値規範性を表すのが「公理」であり、セン測度では貧困者内部の相対的剥奪の程度を順位付けする「公理」を課しており、それは山崎によると「順位付けされた相対的剥奪<sup>15)</sup>」、鈴木興太郎 後藤玲子『アマルティア・セン 経済学と倫理学』によると「公理R（序数的ランクによる重み付け<sup>16)</sup>」として説明されている。「すべての貧困層を所得の多い順から少ない順に並べた場合、この順位の値が大きい程、その人は同じ貧困層の範疇にいる他者と比べて相対的剥奪の点でより窮乏状態にある<sup>17)</sup>」と言う視点、立場を反映する公理である。

具体的には貧困者内部を、貧困線に近い相対的に豊かな層から、最も所得の低い層まで、所得の低い順に、より低い人にむけて順位づけをする。（貧困者人口  $q$  人の社会では最も貧

<sup>15)</sup> 絵所秀紀 山崎幸治編著 『アマルティア・センの世界—経済学と開発研究の架橋—』 P86 晃洋書房 2005年2月25日

<sup>16)</sup> 鈴木興太郎 後藤玲子『アマルティア・セン 経済学と倫理学』 P224 実教出版 2005年11月25日

<sup>17)</sup> 絵所秀紀 山崎幸治編著 『アマルティア・センの世界—経済学と開発研究の架橋—』 P86 晃洋書房 2005年2月25日

しい人の順位は  $q$  となる)そしてセン測度では、貧困ギャップにその順位を掛ける(重み付けする)事によって、その社会の貧困順位が大きい人の貧困ギャップ程、貧困率を押し上げる事ができる。社会の中で、より貧しい順番の、より相対的剥奪の強い人々の所得ギャップが、より貧困度を押し上げるわけである。

後藤はこの関係を「本来は純粹に記述的・操作的な役割を担うはずの不平等測度でも、所得分布が含む不平等度を総合指標に集約する方法の選択を通じて、われわれは特定の規範的観点にコミットせざるを得ない事になる。<sup>18)</sup>」としており、不平等測度は所得分布と言う事実の記述でありながら、その集計に関わる「方法の選択」において規範的判断を織り込むとしている。経済学に倫理学を結び付けた規範的経済学とされる所以である。

そしてこの事は「貧困概念や貧困層の捉え方に即した貧困計測のあり方を、指標が満たすべき特性、すなわち公理として明示的に議論する基礎がセンによって築かれた。<sup>19)</sup>」と指摘されている。

「公理」とは社会的厚生関数に掛けられた必要条件、所得情報集計上の縛り、所得情報のある変化に対応する、貧困度、不平等度への期待値の設定と言った内容といえよう。現在、多数開発されている貧困指標、不平等指標は、それぞれが弾き出す貧困度、不平等度について、その社会的厚生関数としての測度が、ある「公理(縛り・条件)」を満たすか否かによって、その測度はどのような貧困観、貧困概念を抱えて構成されているのか、その特徴、傾向、規範性を分析的に明らかにされる事ができる。

こうして各測度の弾き出す値は、どの公理を満たしているか否かによって、その値の示す傾向性が、比較され、検討され、吟味される事ができるのであり、この逆向きの道筋から、多様な傾向、価値規範性をいれた多くの測度が開発されている。

##### 5. エンタイトルメント・アプローチ(権限アプローチ)

(センの開発経済学に関する研究の思想は、「明示的あるいは暗示的に、常に母国インドを想定しながら展開されてきた<sup>19)</sup>」とされている。)

1977年、センはオックスフォードへと移っているが、この時代のセンは「貧困と飢餓の経済分析の基礎研究、福祉の経済学の哲学的基礎研究など、きわめて実り多い成果を挙げた」とされ、「開発経済学や貧困と飢餓の経済分析への貢献は非常に重要であり、現代の経

---

<sup>18)</sup> 鈴木興太郎 後藤玲子『アマルティア・セン 経済学と倫理学』P80 実教出版  
2005年11月25日

<sup>19)</sup> 絵所秀紀 山崎幸治編著 『アマルティア・センの世界—経済学と開発研究の架橋—』  
P107 晃洋書房 2005年2月25日



済開発と貧困研究に対して大きな影響力を持っている。<sup>20</sup>」とされている。

1981年の『貧困と飢餓』[Sen 1981]は、「国連や世界銀行など国際機関における大規模な共同研究を含む」ものであり、「貧困・飢餓・飢饉に関する膨大な研究の出発点を形成した記念碑的著作<sup>21</sup>」とされている。

(1970年代、80年代はエチオピア(1972～73年と1984年から1985年)、サヘル砂漠地域(1975年旱魃1985年大旱魃)、バングラデッシュの飢饉(1974年)が相次いでいる。)

ここでセンは、飢饉のような状況下では不平等問題としての相対的剥奪(貧困)が絶対的貧困にとって代わる事はできないのであり、「相対的剥奪は絶対的貧困を補完するものである<sup>22</sup>」として、二つの貧困概念の関係を導いている。そして所得を媒介とする貧困測定によっては、様々な社会の貧困度を比較できる貧困測度を特定することはできない事をふまえて、飢餓が蔓延する飢饉の分析においては、所得ではなく、食糧を手に入れる諸条件である「エンタイトルメント(権限)」概念による飢饉へのアプローチ(権限アプローチ)を試みている。

この「権限アプローチ」は「実質所得や購買力だけでなく、雇用制度や社会保障、相互扶助のあり方など、より広範な内容を含んだ概念」であり、飢饉の分析、さらには「慢性的貧困や経済開発全般」の分析において、大きく貢献したと指摘される<sup>23</sup>。

「権限アプローチ」への評価は、その構成から「せつかく能力や資格に注目していながら、個人の福祉を評価する物差しとしてはあくまで『財・サービス』という伝統的な経済学の物差しにとどまっている<sup>24</sup>」との批判もなされる一方で、「生存維持のために基も基本的な手段となる食糧に対するエンタイトルメント(権限)に焦点を当て、それを『財・サービス』の物差しで評価する事が、十分に根拠あることである<sup>25</sup>」とも指摘されている。

やがて1985年には、センはエンタイトルメント(権限)が産み出す「ケイパビリティ(潜在能力)」へと関心を移し、『福祉の経済学——財と潜在能力(ケイパビリティ)』を著してゆく。

---

<sup>20</sup> アマルティア・セン著 鈴村興太郎・須賀晃一訳『不平等の経済学』P281  
東洋経済出版社 2008年9月

<sup>21</sup> 鈴村興太郎 後藤玲子 『アマルティア・セン—経済学と倫理学』P8 実教出版  
2005年11月25日

<sup>22</sup> アマルティア・セン 黒崎卓・山崎幸治訳『貧困と飢餓』P289 岩波書店 2004年5月

<sup>23</sup> アマルティア・セン 黒崎卓・山崎幸治訳『貧困と飢餓』P284 岩波書店 2004年5月

<sup>24</sup> 絵所秀紀 山崎幸治編著 『アマルティア・センの世界—経済学と開発研究の架橋—』  
P90 晃洋書房 2005年2月25日

<sup>25</sup> 同上